南阿遊谷子編纂
無郵國主人校正

異國奇談和莊兵衛叙

道者玄亦玄者也雖然既謂玄亦玄也則非玄亦玄者也人欲謂其大反小其物道豈與筆硯哉無何有之鄉何大螟蛉未必小而謂大也小也者其眼目之大小而非無何有螟蛉之大小也矣今閲莊谷子所編之書使人茫茫乎如忘焉

異國奇談
東京泰山堂
雙景齋
21 2753

N615

異國奇談 和莊兵衛叙

道者玄亦玄者也雖然既謂玄亦玄也則非玄亦玄者也人欲謂其大反小其物道豈與筆硯哉無何有之鄉何大螟蛉未必小而謂大也小也者其眼目之大小而非無何有螟蛉之大小也矣今閲莊谷子所編之書使人茫茫乎如忘焉

此即是書之瞑眩而玄亦玄之界埒也閱此書謂有也者未也謂無也者亦未也有者無也無者有也有無者無有也自忘大小有無而後能識大小有無矣不乎擬谷子曰唯遂以爲叙

秦川散人醉書

序

我魂を尻の下ゟ敷てつく〳〵思へば。物を洗ふ水を入る水瓶ゟい水の垢がつき油垢を落す如か袋ゟは糠の垢が殘る。身の垢を洗いんとしても後〳〵の道ゟ入ば。洗ひ落をかたもしらら道の垢がしみ込我しらを。儒ゟは儒砂あり佛ゟい佛砂垢萬の道ゟ万の垢あり。其垢我去て道我學ゟ甚かとし能ゟげんゟ着氣ゟ合と枕し。四支を心ゟよせて眼をとばきむ。森羅万象をそひ来り或い導を或い迷ゟ其ゟぎり我去ゟを。是を號ゟ玄々界といふ其世界我や〻打過むおのづゟら眼をとぢ或い嶄高く或い枕を捨或い四支をなげうつ。此世界の名をしるものなし。是をしるもの能身の垢を落して道砂垢ゟよおれを。今太平の世ゟ生れた幸ゟからげて小便をれば。をや四角な字を習ひ。またげゟ糞をするやうゟ

なればちや三十一文字などと味ゐる故に根ある葉から生出けの文肖なものえすくあし中ぶらりのなまゝえ人間は釋迦も孔子も氣に毒がられしとあり。予が子孫まもかの中ぶらり有て此書を見ば淺はかなる笑艸も先人れ筆にあとゝ思ひて彼賢人を止る事をあらんかと言に行過るを恥ざるは絲づゝの牙れ熊れ牙をりするどく。ゐよ鳥の聲の鴨の聲より高たが如しと酒器ともに語りあひて筆を染るものありし

安永三甲午初春吉日

南阿

遊谷子艸

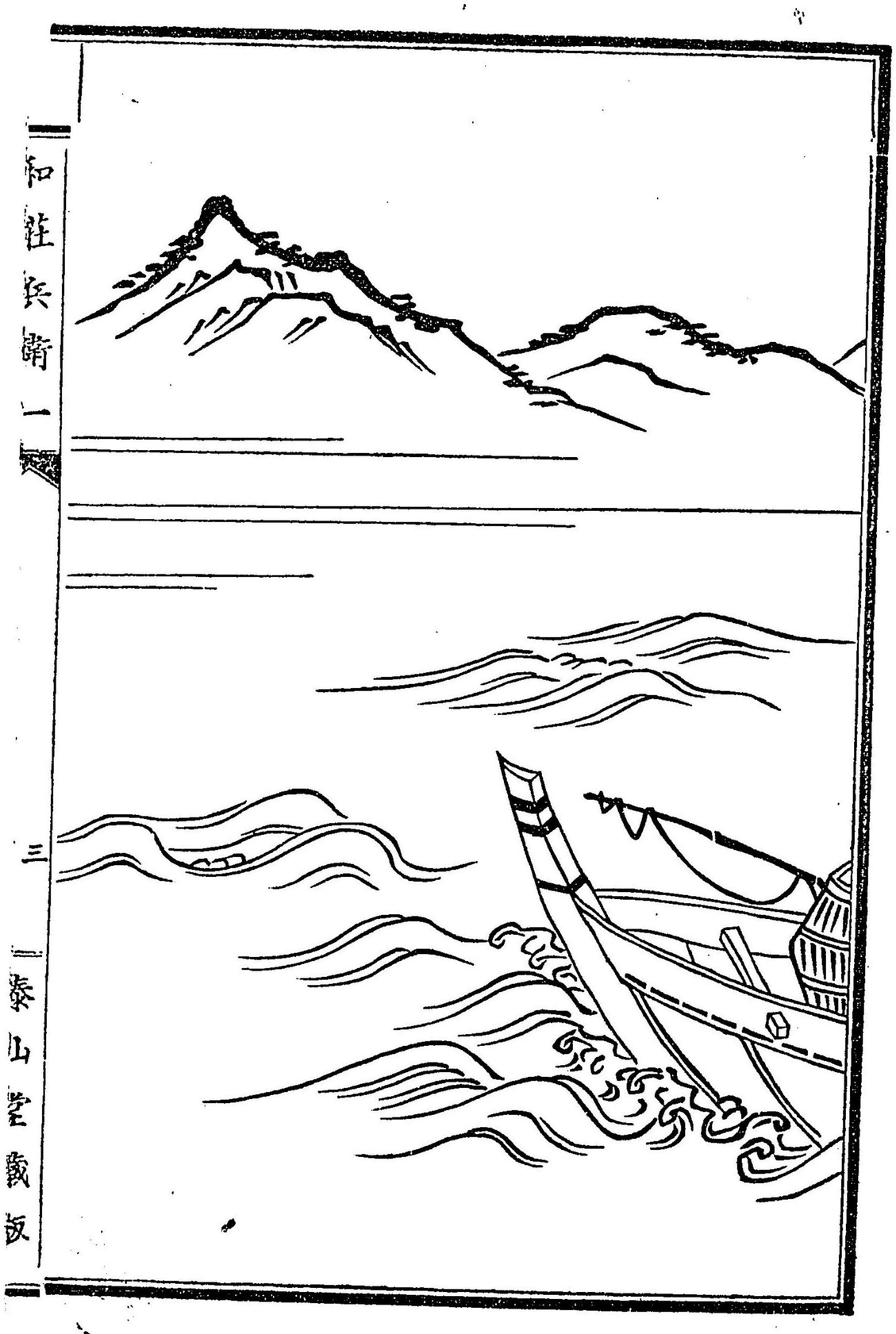
異國奇談

和莊兵衛卷一

不死國

四海浪靜に國も納る御代おれや爰に肥前の國長崎に四海屋和莊兵衛と代々唐物商ひ仕ませよく家内十人ばかりゆたかに暮しぬ所がらといひ文才もある男にて常に唐人紅毛ぢつ丸合和漢をあへまぜちんぷんかんまくらしなるが八人口に上の分と身の程を知り。四十八の春一子周藏に世活を渡本家より二町ばかりへだて。小庵を建て身ぢりぞ丸。丁稚長松に飯たかせ心まゝの世渡り其身性得漁をあのみ。毎日毎夜磯邊に出て魚を釣けるが後には舩も能さゝ覺て長松に留主せよと言付置たゞ一人舩漕出し片手に櫓柏子をとり片手に釣竿針のゆがんぢ大公望のやうお顔して。常に是のみたのしみけば。比しえ八月十五日今宵に名にしおふ夜あれば世俗の風雅顔してとづね来るもむつかしと暮前より只一人例の小舩に竿さして爰かしこと漂ふ内ち程おく東の海原より金橋を渡るがとく。潮にあらひ上たる名にしおふ月さしのぼれば沖の岩おみ汀の松繪にかくとく樹にのぞり兎も涙をはらはるけしき口に物の入ぬとおれば。價千金とも二千金とえいふべし。四時清興皆皈月自古吟人只說秋と口ず

さみおぼえず磯邊をはなれ。一里ばかり沖へ漕出し月まむかふてよねんなく魚を釣うち西の山の端まに鵜の乘そふな黒雲一むら立ぞと見へーが雨風ぞよ〳〵催をれば替りやをき秋の日和ゆだんならぢと櫂を立直し磯まに近よらんとをれど次第々々雨つよく。吹風帆を破り柱を折船い飛が如く沖へ〳〵と吹出され命をかぎりと櫂をおー立右よ左よとうろたへる内月も雲まに引つゝみめざをもたらぬまつくらやみ東西をまかず何國へ船を押べ知やうもなく眼も力もよはまはてせんかたなれて覺悟を知ぬ命あらばいかなる島へも流れ寄べし此上い天道まかせと船の中まに膝を組折々水をかへ出し。たゞ行先い運次第風次第と夜の明を待けるまに風いよ〳〵はげしく船い何國ともなく漂よひ吹おがさるゝと何百里やら何千里やら夢やらうつゝやらは中程なく夜も明東と覺しき方あかく成けれども雨風たゆみもなく海上いたゞ白浪雪の山の如く何國へ行べ知やうもなくあれはて、其日も暮ぬ。かくのごく三日三夜ばかりして。やう〳〵雨風おさまり朝日ほの〳〵と立のぼりたれども。はや日本の地いはるかまはなれたりと覺へて海のおもむきも空のさまもかはりたり。いづくを見渡しても島も山も見へず。風と潮にまかせながれたゞよひ釣を下て折々魚を取俊寛僧都の境界生魚を喰て。海上まに日をおくる事凡三月ばかり流れ行と何万里といふ數もたらぬ何日といふ日も志らず。うつら〳〵と漂うち。かねて聞し泥の海とおぼしき所に来れば。風もなく浪もなく。釣を下ても魚もかゝらぬ次第々々まに氣力もつかれ。船の中まに打伏て命計終り計待と又十日ばかり念佛の聲もほそ〳〵と玉計緒の切る事今や後やと待ける内東の方より芳しき風そよと吹来て咽まに入と夢のごく覺へけるが。忽地氣色たしかまに人こゝち付ければ。是いふしぎと頭を上て見まわせば遥むかふまに大なる島見へたり。其島の方より吹風身まにあたれば。たゞ何となく心地よしさらばあの島へこぎ渡らんとよろおびながら櫂を押立れば此廿日ばかりに覺ぬ力出て。次第〳〵まに近よる程。心地能後にいさつさ聲を出して半日ばかりまに彼島まに漕着たり。先久しぶまに水を飲んと磯に上つて尋ぬれば大なる泉あり常の水とかはりて甚ざ芳しく色赤し。おい〳〵手まむをんで一口のめば味ひ甘く腹まに入やいなや五臓六腑にたゝみこたり身躰たつかりとつよく成此五七ケ月食氣なき腹なれば。此水を一口のみてひだるきをも忘れ常より氣力も健なり。是いいかなる神のたまけぞや。先爰い唐土か日本か天竺かたづねて見んと大なる瑕を越内まに入て見渡せば家居土地柄目なれぬ草木の生さま日本とい事かねり異上をぐれてよき國な



り何といふ國ぞと爰かしこ見めぐる内家々より男女大勢出来て和莊兵衛を取まいー何やらん口々にいふてふーざそふに守り居れば和莊兵衛思ふやう是は何さま日本の内でもおし又は蝦夷琉球の人品でもおー此結搆さは南京か北京の内おらんとかねて唐音知を自慢にて人品齊緒ひーてちんぷんかんと問かくれども一ツも聞へぬ親ーて木兎を鳥の取まいた樣に大勢が口々にいへども唐人にも紅毛にも終に聞ぬ音聲一向通ぜぬ顔も網も切て。あきれ果て居る内役人らしき人五六人出来り相談ーて人を呼まやる体へ。ばらく有て年のころ四十ばかりの惣髮群集を押分〳〵和莊兵衛が前に出唐音にて言やう其方は先何國の者いかおる仔細にて此所へ来りしぞとたづねけり。和莊兵衛も唐音にて我は大日本長崎といふ所の者おり難風にあふてはからず爰におかれ寄たり先此所はいかおる國ぞと問ければ彼人はたと手を打て扨々はる〳〵とおかれ来たる者かお先其方は仕合よきものおり聞も及ばん此國は不老不死國おり中華の境を去事海上凡五六万里其術をあらざれば往来人力のおよぶ所にあらぬ斯いふ我も元此國に生れしものにはあらず唐土秦の始皇に仕へ徐福といひし者なり始皇不道愚蒙にて不老不死の藥を求来れと我其役をかうむりやう〳〵と此所に来ることを得

たり。たとへ不死の藥を取得て歸るとも長く始皇の不仁に仕へばいかおる難にもあはんと行末をはかり直に此國にとゞまりたる早數百年を經たれども氣力顔色少もかはる事おー汝も今より此國にとゞまらば無病にして長壽おる事限りおー又本國に歸らんと思ふとも中々輙く歸るべき海上にあらぬよく〳〵覺悟を定むべーといと念ごろに物語ければ和莊兵衛も手を打て扨は聞及びし徐福公にていか不老不死の國有とは聞ーかども。さら〳〵誠とは思はざりーに。はからず今此國に流れよりたるは有がたきことおり何ーに不定世界の我國へかへるべきとかぎりおくよろこべば徐福もいよ〳〵嬉ーがり日本は我古郷の隣國おれば一入おなかーくいざ先我屋へ同道せんと打連立て徐福が宅へ落つき客やら懸人やらにて二三百年くらしぬ扨此國の風俗を見るに人に死ることなければ産るゝこともおー千年二千年の内にたま〳〵一人死ることがあれば其かはりの人又一人生る。されども是は幾万人の中に一人もまれおることにて皆歳のころ四十ばかりの顔色男女とも病といふことはひもなく四季とも雨風序よく五穀よく實のりゆたかおる國おり日本の牛馬のごとく家々に大おる鶴を飼て耕作社たもけとおー往来する時はこの鶴にゆられ〳〵の裝束して其背中に乗て飛あるくことおり和

荘兵衛をそろ〳〵と居おゞむま丶自然と鶴ゑも乘おらひ心とけ合たる友達も多く成て毎日〳〵所々見物ゑ飛まわりけり名所舊跡多き中ゑも城下よゑ二里ばかり東ゑ伏見の桃山十倍ばかりおる桃山あり紅白枝をまゞへ花の色香も他ゑまさりたり。花の籠わ背揚屋町芝居茶屋ゑておらひおゑ紅樓昌軒をおらべ。やぐらをおらべ芝居の太鼓茶屋の三味線大坂道頓堀京の四條江戸ゑ木挽町宮島金ひらの市を。一所ゑよせたりともおよびおき賑ひ紙を切て蝶を飛し石をたゝいて羊ゑもるおらくり芝居もあれば歌舞ら駒を出し煙草のけむりて我姿を吐齎藥賣の辯舌おがるゝ谷川の水柳の枝に衣のかけたかんばんの見世ものわ暮をころした報ひにて暮ゑ生れたといふかたわ物御評むん〳〵と横鉢巻りゝしげおる向ひがわの大芝居わ水戸札ゑづか十文で小ひ壺の口から這入て行ば與わ千疊敷の取はおし名ゑあふ立役女がた色をくらべ評ばんをあらそひ見物ゑ群集押合せり合赤前だれの中居の往来もいそがしげゑ藝子舞子ゑぴらきやらよねの門立太夫の道中春の日も長柄の傘にかたむ紅安さ鬢の梅花の匂ひわうすげわひの霞ゑまゝり。鶯も尾を振て迎る藝子のかん齊三日月も黛ゑ恥ておぼろおり夜晝ゑかぬ糸竹の尻も結ぬうかれ客魄を雲の通ひ路ゑ飛をもことわりおり。ゑづか花二ッ三ッ買ても能笛を吹琵琶琴までも妙を得たる天人のおい子羽衣をひるがへ〻て舞うたひ太夫天神多紀中ゑも日本のよし野高雄のたぐひわただし。稲幾千代色かへぬ松の位の太夫職西王母をはじめ大陽女大陰女おどの全盛肩をおらぶるものもおく多くの大盡うはゝをぬかし。鐵拐大盡わ袂を質ゑ置黄安わ亀を賣拂ひ。さしものの大盡と呼れし東方朔も終にわ遣ひはたして今わ太鼓持と成下り孫志邈わあんま按摩久米の仙人わむかしの若氣ゑこりもせぞまたしても〳〵白ひ脛ゑ魄をぬかし少々の貯を遣ひ失ひやう〳〵繼々の木の葉衣ゑてよみ賣して哀おるくらしおり。いかおる賢人も仙人も色ゑ迷ぬ國わおれものと見へたゑ。桃山より左の方二里半さきゑわ。八千年ゑ一度咲椿山もあり。此花盛わ法隆寺の開帳と同じ事度々わおいと珍らしい事おりとて分て群集おびたゞし思ひ〳〵の衣服はてをつくし美を盡し男も女も皆鶴ゑ乘たれ〳〵日本の八月北鴈の渡るやうゑ竿ゑ成櫃ゑ成飛行有さま〳〵の遊樂言べゑものべがたし叔此國に死るといふとも病といふ事もおさゆゑゑどうたたもいやら其味を知るもゑおし。いゑへ天竺唐土より佛書少々いたりて極樂の結構成尊を開て死ををめつたむおやうに能事と心得長生をるを悲しがり。千万人の内に

.1212753

不思議ゑ一人死る人があれば日本で仙人に成たやうゑ羨しがり天術とて死る術をおらひ山へ這入谷へ行色々と荒行して學どもとかく死得る人まれおりよろづの喰もの飲物ゑも或ハ人參山竿鰹の鴨のとて腎をまし脾胃をたよくそるおどといふ類ハ長生の大毒あるとておいがつて喰ず人をおろそ程の毒あるものを珍味として貴人高位の人專ら賞翫をるとおて魚の内ゑも人魚などハ殊外澤山ゑて價も安く和泉路の鯖のどく煮賣屋の店にハ皿ゑ盛軒ゑ鈎て有ども長生の毒ある魚おりとて人らしき人ハ手ゑも取らぬ皆卑賤の者の喰物おり河豚ハ甚ど珍らしく價も高く珍客おどの饗應ゑもふぐ汁ゑ煤の粉をぬり蕃姿切ゑハ西瓜のおぼり汁をかけて喰或ハうおぎ此鱠菱蘂草の鉄醬和心太ゑハ和中散をまぶして喰もおかし河豚の煤漬班猫此塩辛を喰へば。さそが不死國おれば死ほどのとハおけれども少し其毒ゑあたりて半時か一時かぶらぶらと目のまふのを日本の者の酒ゑ酔たるやうゑ嬉しがり死るのがこんなものて有ふと。手をたゝいてちら〳〵をるハいのとうたひ舞て是を樂の最初とも或ハ年頭五節句其外の祝ひ日ゑハ屏風を逆さまゑ立暖簾をかひさまゑかけ白むくに淺黄上下いかゑ物いまひんをる家ゑハ年頭帳の上書ゑ御悔帳と書もあり人の子を譽る追從ゑも御達者

そふおといへば二親氣にかけていまゝしがり御短命そふおお生れ付といへハ左樣おら能ござりまそがと嬉しがるとおり和莊兵衛もはゞめ二三十年の間ハ此國の風俗安房らしくおかしく思ひ頗ゞ死ぎとハ何でもうまひ國へ來た事とよろおびけるが百年二百年とも逗留の中いつとおく此國のすがたゑ心うつり毎日毎年あひもかわらん長生ゑほつとして死れぬと思ふ程死たふ成身を投てのけんと思ひ深ひ淵へまつ迷さまゑ這入て見れば何のともおふ浮上り水の上を陸路のどくあるくと自由ゑてとかく沈むゑおづまれず是でもいかぬと高い山へのぼりて數千丈の嶽の上から飛て見れば。屋根から猫の飛だやうゑこぶらがへりもせゞ下へおり立どふしてもうゝしても死やうゑ死おぐみとやかくと思案の内きつと心付おぬこそ幸おれ是より三千世界をめぐり國々の風俗をくハしく見ばやと思ひ付儀ゑ命大切ゑおり下卑た人ゞやとゝらハんゝてもいとハず人魚の鱠人參の和物隨分長生をるものを朝夕ゑ喰ひ込徐福ゑハ永くゞ世話に成たる謝禮の一通を殘し其跡ゑ勝れて羽根つよき鶴を盜出しやがて打乘り南をさして飛去りたり

養生

あら玉社年のはじめから蓬莱山をかざり福壽草を鉢に咲せ。四の字を嫌ひ壽の字を嘗しがり高砂の松の下にやう〳〵木の葉かゝあつめて居る。皺くたの尉と姥とまあやかりたがるもとかく長生が仕たひばかり人がおろかおかと思へば鳥も獸も生あるものは皆死をにくみて生をあのむ。どうして死るのが惡ひやらどうして長生が能やら根をあらして尋てみれば何の事やらたねひあり覺てゐ身を勞し心を勞し寢てゐ身を休め心を安くす夫から思へばいや〳〵と言ながら死て見たら思ひの外心よひものまて是を知たら早ふ死だらよかつたものと思ふ事が有まいものでもなし花ゐちり月はかたむくゆゑ人社おがめとも成べし花ゐ春から春まで咲ぬ名月ゐ毎夜宵から朝まで雪も年中降ぬ。おがめまゐ成まゝ人も生通しまで生てゐ嘸いとも思はず此不死國のやうまで死たふ成も理りおて今日の安樂まで心迷ひ死とむおひねとはりおがら其迷ひ甚しく無理むちやうまで長壽を得んとて都て壽をそおふ人多し。いまゝへまも周の穆王秦の始皇漢の帝のとて口鬚長ふ生して玉社冠をかづき。ひと分別有をふお貌して仙人まで成たがりい為〳〵のはとのかいまで欺されさま〳〵の藥や呪まて長生も得せず今の世まで愚痴の名をのおされたり本草綱目まさ

ま〳〵の奇妙を書おらべ何々の藥をのめば不老不死雲まのり水のうへをはしるのと出はうだひのうを八百皆ゆまゝへのはとのかい仙人好のいひ出しゐると成べし。今の世にも富貴の人ゐ病もおれ身まいろ〳〵の藥を常まのみ按摩をとらせ灸をすへ都て不養生おはを多し藥も灸も針もあんまも皆病を治する能ありて天命を延るものまゐあらを病おき身まを用べからず。身まを常まを成てゐまさに病有時其驗おそきものおり少まても病ある時ゐはやく醫まを求て藥灸或ゐ針按摩を用て輕れ内まを治べし少の病まゐ藥まも及ずとて其病の重く成を待を多し大おる誤なり病ふかく成てゐ藥も灸もおよびがたきものおり早く治して一日も病苦おく身健まおらべ長壽ゐおのずから其中まあるべし不死國のをゐりまてあれらめ無理まを仙人を羨む死をおそれを。たゞ己を用ゐ心を泰山社安れまおくを無病の人の養生といふべし

異國奇談

和莊兵衛一

異國奇談

和莊兵衛巻二

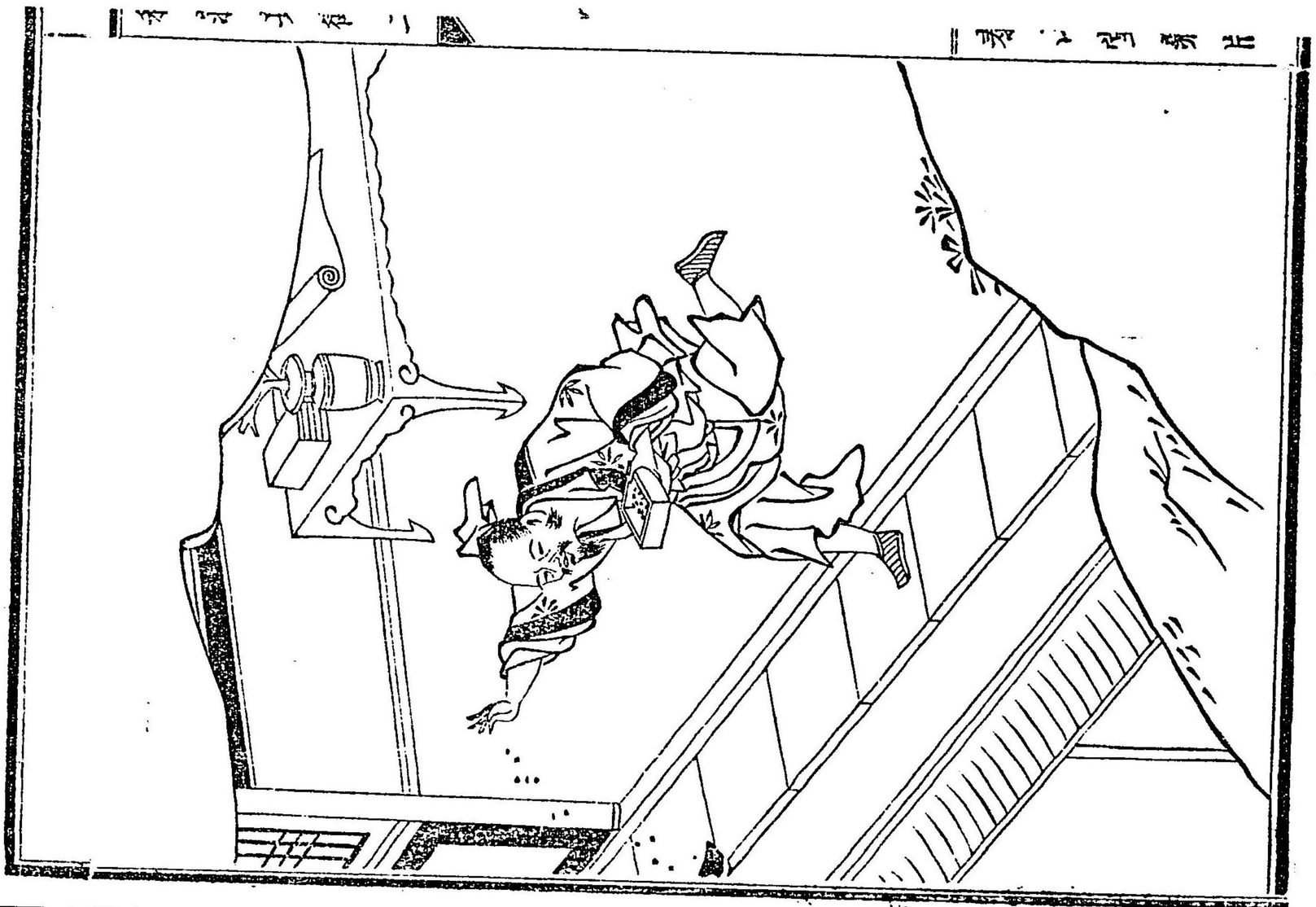
自在國

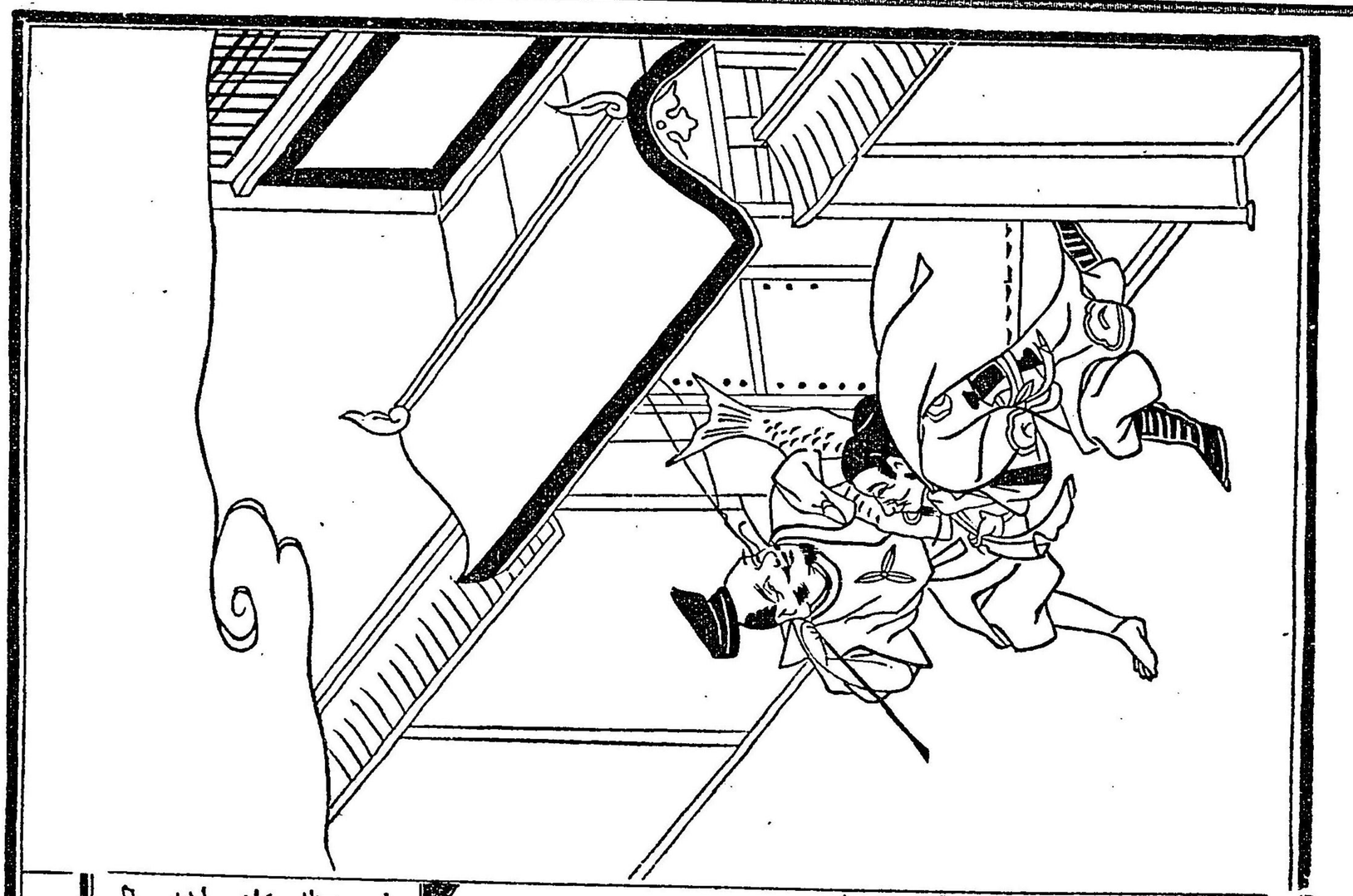
扨も和莊兵衛は不死國を出しより。何國といふ心當もなく鶴にまかせてめつたむたやうに飛けるが。凡二三万里も行と覺へて大なる國有ければ。いかなる所ぞさらば一見せんとかゝこまをり立もとより見ぬ國なれば。たゞ覺束なく立まどひて。田舍道者の宿忘れたやうに爰かしこと見めぐるに其國の豊饒なるさま。不死國にも亦はるか勝りて。家居人品の美麗たとへんものなく。貧者らゝき家とても一軒もなし。在所と町のさかひに蠟色に銀金具打たる大橋ありこれ〳〵打渡て見渡せば。打つゞきたる町家にいづれ劣たるもなく。月宮殿の諷より外に聞傳た事もなく。瑪瑙の柱瑠璃の梁。庭の砂は金銀を入ちがへたる石畳。琥珀のとび石に。及べき塵あく〳〵もなく。珊瑚珠の出格子。堆朱の雨戸。白銀の尾ぶきに。露も霜も置まどひて。脚をとゞめ。硝子の筧に朝日かゞやき。紀のふの雫玉をあざむき。燃るばかりに影うつる。程々緋の暖簾に。金砂にてふと〳〵と家名を縫付。現銀かけねおしの文字を織入たる錦の暖簾かけたるもあり。髪結床辻番所かりそめの湯殿。雪隱も。一向宗の佛壇より。紀れいおり。いかさま是は極樂の城下へ来たそ

ふおと暫くあきれて居たりしが先かしこへ立寄て是ハ何と申國まてハいそと尋けるハ。黒繻子のどてらヨ天鵞絨の袖おし羽織羅背板の鞣韘して。いそがしげなる男二三人出むかひ其元ハ何國の誰ぞとたづねける和荘兵衛も其出立ヨびつくりして慇懃ヨ手をつかへ。私生國ハ日本の者おるが故ありて古郷を出不死國ヨ暫く逗留いたし夫より國々一見のためかやうヨ思ひ立たりと答ければ主と覺しき人立出げヨ日本ハ君子國とて唐土ヨも劣らぬと聞及ひし上國おり。是此國ハ自在國とて日本の地を距事幾万里といふとをちらぬ。ゑる〳〵の所よりよくも来るものかな。我方ヨとやめて珍しき物語を聞ん。先とおゝへといざおひ行其内ヨ大おる家に入ぬま〳〵ともてなされ。すでヨ此國ヨも二三十年脚をとゞめ委しく見物して扨此自在國の有さま。万事自由自在いはんかたおし百姓町人のいとおみヨも春耕といふ事もおく秋取納る世話もおし。米の原麥の原其外大豆小豆粟胡麻まて。それ〳〵ヨ品を分て涌出る大おる原有て。いつまて取てもつきるとおし入用のもの時々余所の國の水汲やうヨ桶ヨすくひ袋ヨ入来て自由を叶へる事おり米の原の左の方ヨ油の谷ほそ〳〵と流ヨ岸根に燈心草生しげり。白浪のうねをおし汀の蒲ハ蠟燭の穂を出したり。右の方にハ酒の大川滔々とながれ。さす

筏あれバおさへひかへの舟もあり。肴の岡を打越れバ白砂糖の砂原あり。桑酒の沼美淋酒の池焼酎の泉ヨハぴんとむねつるべを仕かけ上戸の心に叶ひたり。又爰かしこに饅頭の森餅の林ありて。枝〳〵げり葉さかりて春毎ヨ金米糖落雁の花咲餅まんぢう能實のりて年ざれもせず。日本の虎屋より輕く風味もはるかヨ勝たり。金銀豆板の川原もあり。瑠璃瑈璨瑪瑙の岩角ヨハ珊瑚珠の枝夕陽ヨかゞやきうり夫より河邊をはなれ山々峯〳〵ヨ登りて見れバ絹布木とて芭蕉ヨ似たる大木何本ともおく生茂り其木の葉幅廣く長ハ何丈といふ限りもおく巻芭蕉のどく葉をまきて生出みお此國の人衣服と爲とをり。四季ヨつれて木の葉をも〳〵ヨ色品かえり春ハ霞の衣と供ヨ紗綾ちりめん羽二重綸子の木の葉芽立て。梢々ハ色をあらそひ夏山ハ若葉ヨハもん紗もん紹絹縮ハいふヨ及を越後ちゞこ奈良晒までのび出て茂り合たる木の間よりもれ出る。初音ヨあたへて賤か垣根の花卯木まで手ぬぐひ雑巾の葉を出して自由を叶へ秋の初風身ヨ染バ折ゑりがをヨ峯々のもがた打かはり。今織錦御所染ヨ龍田山を低しと見くだしやがて時雨打そゝぐ比ハ山の木〳〵き少し物さびてハ見ゆれども冬枯といふとをもおく木綿紬綸子天鵞絨を始綿子紙子まて生出れバ何でものぞ次第ヨはさみ切て衣服を調るとおり。

自由なる衣食の二ツはなみおらず閑及し女護の島も則此自在國の領内にて城下より二里ばかりの船渡しを越て行べ男は一人もなく女ばかりの國なりなかも余國にをくれて色白く自在國の内なれば雲の衣をやう花のすがた何れ劣しは一人もなく其うへ千びきの糸のくるしき賤の女の手業一としてするに及べをも只あしたには花のもとに嵐をいとひゆふべには月社前に雲をかなしき裏乞鹿を聞ては涙をうかめ詩を吟じ歌をよみ琴三味線に明し香茶湯に日を暮し楊弓の鞠のと遊藝なる業とし身だしなみに打かゝつて居るゆゑ手足のゞんぢやうに心ざまもやさしく貞節なり昔はやう〳〵日本の方から吹風に身を任せしとかや其後自在國に通路して今ではなめ過る程粋に成面々器量じまんして唐土日本には楊貴妃の西施の衣通姫の小野小町のといふ美人衆が有たげな少見たい事ぢや去なから素人の國に産た人ならかはつたとも有まいと。女護の島を尋にかけ高くゝりの廣言もなくてらし自在國の人々此島より思ひ〳〵物好次第に振袖若詰或は鴛子氣に入た美人を何人も〳〵連来て女房妾腰元はした飯焚まで美人を遣ひ朝から晩まで能とぢくし和莊兵衛は寶の國へ入たりと嬉しさ面白さたとへむかゝおく毎日〳〵氣にあふた友達四五人伴ひ呉王夫差の屋敷めぐりをるやうにさま〳〵の衣装を着たる多の美人を引つれ〳〵霞棚びく春の野の芳しき草ぶゝしたくまづ酒川のほとりに毛氈打しき辨當野風呂の世話もなく汲どもつたず飲どもはたぬ大さはぎ酒の川遊の千鳥脚友呼つきて腰元はしたは味淋酒池桑酒ねり酒の沼へ所をかへ妾は梅酒の泉に杪を漬小女子は饅頭の枝にぶら下りほたへつくしてさらば是から醉ざまして衣裳山に登り色々の物ず充上着中着帯羽織のぞみ次第にはさみ切だら〳〵の坂道少し下りて餅の林まんぢうの森に入さま〳〵の菓子を飡薄茶濃茶の山の井をのみ夫より野道四五町歸りて綾錦の夜着ふとん打かぶりてねるとなり萬の事斯のごく自由自在にて此國の人貧乏の味をしらぬ先年天竺より知識の僧二三人此國にわたり佛の道を釋聖賢のをしへを物語しに人間の一生樂は苦より出るものにて貧しき者は富を願ひ賤は貴さをねがひ求めがたきを求め得がたきこそ人間のたのしみなれ此國には貴賤貧福なきゆゑに樂もなし外々社國には貧乏といふもの有て萬のこと自由ならぬ食ぶもとめ衣服ぶ求んとて心をつくし身を勤てやう〳〵求得る時の嬉しさおもしろさ其樂たとへんかたなしと談義を釋て聞しければ人々皆涙をながしてありがたがり夫より此國の人々一心ふらんに貧乏をねがひ朝夕燈明をあ





げ香をたき貧乏神祈る事怠らず町はずれに大なる貧乏大明神の社ありて正月十日六月十日二季の祭禮さま〳〵のねり物賑しき提灯のだんじり破たる太鼓をたゝ叩古蝙笠打かぶり素紙子打着て顔淵閔子騫又は朱百年閔仲叔のねりものあれば靈照女が破籠提て豆腐のから買に行俳諧我殿のやせ馬に乗たる道中の體もあり。椀久が物狂ひ藤屋伊左衛門が紙子羽織のあよさ事澁團をたゝきちやうさやようさとはやし立見ぐるしきねり物なれども此國にては珍しく面白し或は正月五節句の神祭りにも一ツ心に貧乏大明神と唱へ奉り節句には夷拂ひ大黒ばらひとて豆を打て七福神を追出し年越の札には傾城のふみに粹といふ梵字を書添て門柱に張も福社神の入らぬ呪とかや。或は升をうつむけ俵の尻をたゝけども。とかく不自由な事出来ぬ来もらねも地から涌餅もまんぢうも棚にあり衣は山に生へ酒は川に流れ。とかく貧乏の仕やうなく何ほしいとも思はねば人間の樂とする事なく和荘兵衛もほつと倦はて。此やうな下國は又と世界に有まいと腹立まぎれ亭主に暇乞もそこ〳〵にして西の方へと飛て行

養生

有磯海の浪間も思も紹あへぬ蜑の身のうへも脇めから見るやうに苦い事ばあり

もおくき川と樂事も有錦のふとんの上て妾に脚をもらせ血鹿の塩がまを取寄て見ても。いつもおもしろい物でもなし苦樂は一がいに貧福によるべからぬ道にしたがふ者はたのしみ道にそむく者はくるしむべし。たとへ身はまづしくても道を守り業をつとめ其身に應じて其のぞみ叶ふ時はよろこびたのしみ又富貴にて家人を多く遣ひ自苦勞せず自由自在に奢を極美食にも飽衣服にもあき遊山翫水も常に成て此自在國のごとしたのしみと成とおく貧賤の人よりおとる事多かるべし樂は苦より出苦は樂より出るものなれば丸で一生たのしみさいとてたのしまるゝ物にもあらぬ。一生苦たひとて苦るゝ物でもなし。日月は晝夜めぐりて休らふ所なくつきる時なし水は絶ず流れて清し。されば うごかず流れざる水はやがて濁りて清き性を失ふ鳥も獸も魚も虫もおのれ〳〵が食をもとめて心をくべる身を遣ひ。一日の貯もなく其日に求て其日に喪ひ怠る事なし故に禽獸に病は稀なり同じ禽獸なれども牛馬犬猫飼鳥などは人によつて食を求め身を遣ふ事過不及あり足と有ゆゑ病あり。まして人は禽獸にまさり思慮有ゆゑ後をはかり衣食を貯置て日ぐ勤ず動作甚ぐ過不及あり殊に富貴の人は心にまかして衣食を求め物飽足て病をお

を氣血壯おる人よき絹を重ね着れば氣もれがたく陽をつゝみ込て内ゟ熱を生じ魚鳥の肉さま〳〵の美食を喰ふて身を違ざる故ゟ消化せず痰飲と成積塊と成て爰かしこの道をふさぎ中風癰疽おゝ種々の病となる心も用ひざれば愚ゟ成身違ざればよはくある事流れざる水のゟごるがごとし。さればいか程富貴ありとも毎日少し汗出ぬ程身を違へば人ゟ病ゝ多おゝものとかや

異國奇談 和莊兵衛卷二

異國奇談 和莊兵衛三

矯飾國

和莊兵衛は不死國ゟて生死の道理を明らめ自在國ゟて貧福を悟り死ふのとておゝい事もなく榮耀榮花も仕つくしされば鶴の脊中も千疊敷も輿も車も辻駕も同事とあてどもおゝゟ飛行しが。一二萬里も西ゟよつたと思ふおろ又一ツ國見へけゝば其内の都と覺しき所へ飛下て見れば家多く建つらね大ゟ奇麗おる門あり内ゟ入て見まはせば男女とも皆紅粉おしろいゟて面をかざりたり亭主と覺し人出向ひ何國の人ぞと尋るゆゑ有さま物語して此國ゝ名を尋れば主ゝさいらしく扇をゝちゆかし。いかゝも日本唐土天竺とやらん小國あるよし粗聞及びしとなり我國ゝ矯飾國とて國大く五穀よく實のりゆたかなる事天下ゟおらぬおく人皆風雅ゟて諸藝ゟならひ文學に達したる國おり暫く滯留有べしと内へ伴ひけるゆゑ。かたゞけおしとそろ〳〵座敷へ通て見るゟ庭ゟ植込石燈籠柱ゟいろ〳〵の詩文おゝ彫て床ゟゝ古篆の一行物其外甚ざきれいゟかざりたゝ。和莊兵衛も茶ゟ往た心持ゟ成。お庭まゝりお座敷の御物好おもしろ紀事おりと兩手をついて譽ければ主よ語おゝ躰ゟて勝手ゟ入。さま〳〵ゟもてなしぬ

暫く有て妻まも御逢下さるべーと案内まひとしくはゆと留木のかほりに連て立出たる其よそれひ年も三十の上に一ツ二ツ錦の褄柏餃の中着の裾蹴はらーて慶子が梅が枝の出端見るやうまに肩からふり込いかめーげまに手をつかへ吟つよひ作り聲ーて扨も〳〵珍ーひお客さまはる〳〵の所をよふ御出おさまた御遠慮をふいつまでも御逗留遊せ御退屈おさまぬやうに。れ慰まにお茶でも香でも蹴鞠でも又に詩歌打雖何成ともお相人に成ませう。お前様のお國元まも紫式部の清少納言のとて小器用お女中がざりまはそふお源氏物語おどに中々面白ふ書まーた。またくしらも文章や詩歌に大ぶん好でござんすとまつこりともせぞ打あをのきて鼻の穴へ富士の山吸込そふお貌。和莊兵衛ま其大言まざよつとして扨もおそろーい女子が有ものかおとあら臘をとられ私に何もあらぬ不調法者でおざりまそと奉公人の目見へまに来たやうに。およげまに成て只まとくとと打おがめて居る内よく〳〵衣裳まに氣を付て見れば。表に綾錦おれども裏に洗い張おあ紛紅のはゐかけ其おくに茄木綿と見えたり。ふしぎおとと思ふ内に内義に襲引つまげ。ゆるりとお休おされと言捨て勝手へ入ぬ合点の行ぬ事かおと其後そ洛〳〵と臺所をのぞいて見れに座敷とに大まに違ひ。やう〳〵古畳二三枚敷て屋根から

天の川社見える所またつた今綾錦着て出たお内義繼々の古綿入まて茶釜の前に薩摩芋焼て喰て居らるゝを見て。和莊兵衛もあきれ果て居たりけり夫より萬の事に氣を付て見るまこの國の風俗にて何事まても男女ともたゞへつらひかざる國おり滞留の内心やはさ人も多く成て爰の付合かしこの見物國柄人氣をよく見るまに表むきに表さいらしい事ばかりいふて内證にたはひおく若者とも今日にこゝ明日にどとよる晝おーまに寄合〳〵。どてら布子の膝引まくまぐらく寒投てまつばさつば夜食まに半袴飯まにぬるい茶をかけ茶椀で冷酒引かけ奴豆腐のつまみ喰二八けんどんあべれ喰下卑た事の有たけをるわろ連が書にやうかん色の羽二重に小袖裏繼おた黒縮緬の羽織で懐から唐本一巻出ーかけ左の手まに水仙のつぼみ一もと提大おあ咬拂ひーてまづ〳〵敷夜前に登雲齋かたの詩會まに參て深更まに及び歸りがけまに貫天山の月を詠て余程面白ふ歸りまーたおどゝいへば。こちらまもまけぬ貌で夫によいお樂手前に慕前から一チ兩傍別業へまゐり花月をいたーて夜を更ー。やう〳〵今朝歸りまーたと豆まおとらを虚言八百皆此國社おらはせおり又或時雪いたふ降て靜おる朝一間の内まに和莊兵衛寢入た貌ーて障子の破から膝手の方をのぞいて見れば亭主に素紙子に丸ぐけ帯ーて茶釜

の前ゑ膝を組女房ゐ古袷一枚にてふるひ〳〵小聲ゑ成てくやみ言此やうゑ雪ゐ降夜着ふとんゐいふゑ及ず綿氣の物ゐ皆質屋へ行外からゐ寒し内からゐ米も薪も逆ひ切。どうゐる事ぞマア晝からは米の才かく心當がござるかと涙ゑ水ゞな嚙ませて。ちやくり上ゑゞ亭主も打ちほれはて心當といふて何とせふ當分いらぬあの燗鍋と俎豆日が暮たら米と味噌と醤油とあぶらと薪とに替て来るより外ゐない因果と此やうゑ寒ふてゐどふぞ一枚請て着せゞゞ子供が冬を得越まい此雪が三日つゞけゞ凝死ふより外ゐないとうらめしそふゑ裏の雪をまらんて居る所へ表口から咬ばらいして西隣の仰山軒お見舞申と門口ゑ立ただかり御亭主内ゑおえするか扨今朝の雪のけしきたまつたものでゐござらぬ覺へず心うかれて出かけましたとこいつも虚言の皮上着ゐ薄赤い黒羽二重でも腹の内から寒ふ成胴ぶるひしていへゞ亭主心得たりと紙子の上へ茶縮緬の古綿入引ばり絹と木綿と晝夜の帶引〆飛て出是ゐ〳〵能こそお尋かたゞけお手前も雪に心をゝみいつもより早く起釜をかけて只一人詠て居ました仰のどく月花ゐ所ゑよつて勝劣も有物おまども雪と申ものゐむくつ不死枯木ゑ山も松も柏も分色ざておき白たへ草木未春花更動乾坤不夜月華新ありと唐土ゑもうたひ遠くゐ日本といふ國の歌ゑも「散花は つもるゐ月のひかりゑてあらぬおがめの庭のまら雪」と申がいかさま月花と申ても雪ゑまさつた詠ゐどざらぬ夜前からの降や雪ゐよわど慥ゑ見えましたがどうやら小降ゑ成て氣ゑかゝりまゝせめて四五日此けしきを置たうござると。たつた今三日降たらこゞへ死るといふた舌から唇の色ゐむらさゐ色に成胴ふるひの興齒をかゝ〓め前章門を押へて迭にまけゞと風雅めかを所へ迎ひと見へて仰山軒が丁雅腰折かゞめ。かざり屋は御隱居裝懷樣から香の御會のお人も大かたお揃ひあされまーたとのお使又お出入の道具やが先日八千兩でお求遊された長八尺の枝珊瑚珠を持參仕まーた。ちよつとお締り遊しませとゐねて言をーへて有ゆ玄真貌ゑ成て申上る然らゞちよと締らゞゞおるまいと去るを見かけて内から内儀が齊高く申且那どの仰山軒樣をれ留おさきませ申〻マアお這入おさきませ去方から鶴の粕漬を貰ふてござりおす且那が好て家主貞良も澤山に燒てござりおす娘が手前てお茶一ツ上まーたい夫ゐ忝おふでざれども昨日孔雀の吸物で食傷いたーて今朝ゐ何も喰ませぬ重てゆるりと參らふと迭ゑおとらゞ言ひちらーて別れぬ。此國の人皆此どく兄弟友達の付合ゑも諂ひかざり朝暮必安からず逢者見るものいやお事ばかりい

ふるゐつとして又鶴ゐ乘飛去ぬ

養生

鯉ゐ長羽織ゐ着かへ兜ゐかうろく頭巾と成重藤の弓ゐ名六一知に引かへ。五日の風紅葉をひるがへし。十日の雨ゐ恭桙基茶香の情をまし居つゞ不ゐたづみを付戸さゝぬ口ゐ諷ひ笑ひ琴三味線ゐ夜を明し脱つゞみ打て日をくらす大平樂の世の中ゐ生れて君が惠の有がたやかたゞけおやとも思はず。うつら〳〵とのゝちらし。算用が合ねばこちの惡事ゐ言ず時節がゐるひ世の中か惡い。つらひ世界ゞや浮世ゞやといふゐ冥加知らず罰あたりとゆふものの成べし。今時の民みゐ太平ゐおこり常ゐ遊樂を第一として麗服美食を甍ひ器ゐ金銀を鏤身の程を忘て賤しき貧しきも自ら貴人富人の美麗を見おらひ心の奢より諂ひ飾を生ゞ遊藝を惠らとしてあそびたゐむれ人付合ゞや禮ゞや義理ゞやといひ立其中から人おどしの贅のといふ事出来て當世盛ゐ時花とおり其人おどしと贅との根元を尋れば氣拙く人をうらやみ。心侈て物足らぬゆゑおいものを有紀おらぬ事を知た貌して後の嘲りをおらぬ目ゆ前を飾る事おり人間の養生ゐ足より大おゐ毒ゐおし貧乏ゐ隠し無藝を取繕ひ無智愚を有やうに人ゐ譽られたがり我與底を見られゞとをる心づかひ。三斗力で五斗俵かさげて居るとく心辛勞氣苦しく朝暮心安かちず胸ゐ巧ありておのづから心神を勞し。さま〳〵むづかしき病と成太平の代に生たる大おる福を得おがら其太平に煩ふゐ愚な事おり心ゐ人の身の大將おれば心神のつかれたるゐ治しがたしとゝや當世諺もおひ諂ひ飾ゐ物を貴し心氣をいため大病をる人甚多し天命おれば貧賤おりとていかゝ恥しい事でもおし。およそ人間ゐ腹一ツ物喰て何でも寒ふおい程着て居れば。十分の事ゐ生得得た事得ぬ事もあり又ゐ業ゐからまれ學ぶひまおく無藝無能おりとて恥でもおし。小人の知ゐ害多きものおれば才智ゐなふても惡ひ事せねば。世界ゐおはい事もおし善も惡も恥も譽も隠も心さへおければ惡ひ事もせぬ理りおり我胸を裸ゐして人ゐ見せて仕舞ば人間の正直神國の養生理を安んずるとやらいふて養生の第一成べし

好古國

旅ゐうきものといへども夫ゐ飲喰起臥のやうゐ自由がおらぬゆゑの迷ひ和莊兵衛ゐ不死國ゐて腸を入かへ世話なしの仙人天地も内も同ぜんゐて是程の長旅でも馬駕籠

常に心造ひもおし鶴も同じく仙鳥あれば主從とも雲を喰ひ霞をのみ雪の程り[illegible]の茶賣行當次第飛次第何國ぞ珍らしい國ゐおいかと鶴の日和待をるやうゑ真上からくるくゝと見めぐり扨此國ゐ珍らしそふお國おりと真中程へ飛下り鶴も羽根をやすめ和莊兵衛も腰をおべーて居處へむかー繪のやうおゑ人大勢出來り和莊兵衛が身の上をくはしく聞是に好古國おりとて則旅宿をあたへ諸國見物のものがさりおど甚だ面白がりて珍らし紀日本人の噺を聞んとて毎日〳〵大勢寄集りさま〳〵ともておーけり此國の風俗を見るゑ万の事いにしへの儘ゑて何程よ紀事ゑても新に出來たる事おく新ゑする法を用ず國ゑ著の沙汰もおー百姓の耕作大工町人のいとおみも皆いゑしへの法ゑて心安くよ紀事もあれどもまたまはり遠もどかーき事のみ多し萬の器物男女の衣服家居物いひにも時花とおどいふ事おー唯此國の風流風雅といふゐ古い事を好み專ら唐土名高い古人の風を學び似せてたのーみとを若者の寄合かりそめの夜噺ゑも思ひ〳〵の流義を立日本の宗旨の如く孔子派孟子派老莊派ゐいふゑ及ぶ或ゐ菊を作り竹を植蓮を愛し山をこのみ籠をもき古人の風を學ぶ事牽頭が役者物ま孫もるが如し一日和莊兵衛旅宿お又隣古物屋東伯といふ人の所ゑ若ひ衆の月次の會有よし。

きいはひの変おりとて和莊兵衛もさそはれて參たり先座敷の躰を見れば床ゑゐあぶら竹の簾ゑ黒漆ゑて斗斗のやうゑ書たる蒼顔の一行物をかけ蓮の花を生たり次の間ゑ三十五弦の琴笙拍子おど用意して亭主ゐ菊の衣を著し客を待所ゑこさがしげおる童一人立出て孔子組の御客さま御出と案内ゑつれ佩玉の聲珊々と聞へて志とやかおる人物二三人足もと重紀どく手うや〳〵しく目たゞし〳〵志づ〳〵と座敷ゑ通り次の間ゑひかへ席狀ゆづり甚だ辭宜ふかし亭主やう〳〵もゝめて下座ゑはき並び座して脇を横たへず其さま慇懃ゑその聲つ紀志とやかゑ蹇舞の堪忍つよく肝癪のおかりし音噺周公の後見ゑ骨折れた物語おどする内程おく跡から孟子派また四五人是もかたの如く威儀つくゐひーて座敷へ通り挨拶一通濟といろ〳〵のたとへをとり組豆ゑ針打やうゑ理屈噺醉ぬ内の生ゐよきおり酒ゐ亂のもとおりと言つゝ既ゑ酒盛はじまる所へ莊子組參たと直ゑ案内言つゝ座敷へ通るや否挨拶もなく横尻ーて尊うた諷ひちらし吸物食々手志お噺歌が鳥へ賢が敵討ゑ往たの蚊のまつげゑ産屋を立て大佛が子を産だのと途方もおい噺ーて酒もりの座を持所ゐ兎角莊子組まさりて見えゝり孔子組も孟子組もおよげゑ成て座のおらけた所へ亭主がたより二三人おどり出是ゐと

ふゞや御酒がはづみませぬさらば一曲あそべせと孔子組へ三十五弦の琴をつき付け孟子組へ竹簫を持かけ大盃で引う弟〳〵大音上てうゝひ出し語り出し千鳥足の月卿からけ千代のたゞめの一おどりと二上り調子ゴさにぎ立れば孔孟い二派あきれた酒にはかりおし亂ゴ及べほとおそ承れ是に御亭主何派でござるゞとがめかゝれに亭主もまゞめゴ成て手前近頃に東方朔を仕るお流儀に氣がはきて御巷生ゴ成ませぬ。こちの流儀ゴお成おされとかく浮世にかうゝたものゞやつゝてん〳〵とまはらぬ舌でさにぎ立れば孔子派孟子派ともゴ。かた法華と見えてかぶりを打ふり茲厚亂飛見明にとゞめずおどゝ理屈ばきべ。そりやこそ例の石火矢様れ道理もつとも去ながら。かたいに〳〵に其身の損よ花の盛がまゝ有ものかつゝてん〳〵やつとせひくだけよれよ聖人めと大勢ゴそゝり立られ孔子も孟子も浮調子ゴ乘て乘て好者にたのしむ者ゴ去かぎ多く聞て其善ふるを擇で是ゴ去ゝがふ道理じやと得手勝手の理を付て終ゴに二派とも數珠を切此流ゴ成や否是にめでたい打て置去やん〳〵最一ツ聖人賢酒も老莊交じて大騒動亞聖おがして誠ひつ舞つ夜もいたく更て締りぬむのしに孔子派孟子派ゴはやり〳〵が近頃に次第〳〵におとろへて今にやう〳〵はし〳〵に二三人

殘り袁彦道張文成の類盛ゴはやる更ふり亭主東伯に孔孟を押ひしぎたりとて限りなくよ福おび猶々廣く諸流を學べんとて先張文成袁彦道李白流を精出し大酒飲で賭奕をうち三日ゑ茶屋ゴ居川ゞけ終にに餘程の身代を雲霞とおし煙も朝夕たゝずみかね膝を入るゴ過じと驕て裏店を借て引込茶粥を喰ひ酒をのみ女房の膝を枕とし出はうだいの大口日本の無好法師とやらもいにしへより賢き人ゴ富たるにおしといへり不義ゴして富貴充に浮べる雲のごとし免かく貧乏せねば賢人の極意に出來ぬサア是から本の事じやと燈を棄て本を讀壁をおぼつて螢の火をもらひ雪がふれば茶碗であつがんを四五はい引かけ此勢ひゴ母者人ゴ筍を掘て進ぜるとて。みの笠打ゐぶり手鉾かたげてあたり近所の竹藪と堀てあるき氷がえれば鯉を取とて池の川のとたゝきまにゑ戻りにに病氣がおおつてうん〳〵うめけば女房に氣の毒がり是ゴこりて。ふつゝり賢人を止て下さんせと涙おゞして異見をれば何を其方が知た事賢人が婦人のいふとを取上るも社か此辛抱せいで賢人といはるゝものかと色々のたはけつくを内身躰にとけ行氷春の日の雪らゝかおるゴ息を繼やがて一重て暮さるゝと悦ぶ内情なやはや夏が来ても蚊屋も得つらず是幸と冷酒飲で裸ゴ成母者人の身がにうじやと枕元

まふんぞり返り高鼾かいて蚊まくれて居れば母親はあく〳〵と悔言世に有た時は。冬は火燵で寒さをあらず夏は腰元どもまを蚊屋つらせ何一つ不自由お事も知らざりしに世の成ゆ紀の淺ましやと夜もすがら泣明せば叔も〳〵文盲お母者人じや賢人を子まを持たやうまもない俗お心底子まに似ぬ親は鬼親じやと夫からそろ〳〵言上り。つらさ紛れの親子喧嘩。まつばさつばと言つのれば旅宿の亭主和莊兵衛隣近所打集り色々と挨拶詫言しても聞入おく終には親の勘當請てあれ〳〵と出さりぬ日本では傾城狂ひして勘當請るものあるまを此國では賢人狂ひして勘當請るも皆其程々をあらぬゆゑと和莊兵衛も笑ひ〳〵此國を飛去りぬ

養生

天竺も天も一つまを思ひ賢人も虎と同じ事で竹の中に居る物じやと片付折角人間まを生れて金銀まを遣れ有たら一生を夢中でやり付るもおーひとなりさらばといふて鈍おものまを昔の事や唐土の事をしゆればめつたむあやうにむかしびい紀唐土鼎屋ーて見る事聞とむかしはおい事じや唐土まはせぬ事じや俗お事じや愚痴お事じやといふて今のとの間まを合をとかく小人のをる事は畑舩頭の舟をさを如く右といへば右過ぎ左といへば左をぎ能かげんまを真中は通らを書物數よみ世界の道理を知り辯說まさるまをたがひ非を理まを曲理を非まを曲得手勝手の道理を付色おき男は五の盃の底をたが如し勝負事は相對でをる事おり酒は天の美録おり皆賢人の好だ事じやと文盲おものは親でも兄でも子曰とちんぷんかんとでやりこめむらしの賢人の能所は學を唐土の我儘者くたびれ者の真似をして次第〳〵まを身持放埒まを成學ぬ昔よりおとる人多し夫故まを文盲お親々は學文すればあのやうまを身持が惡ふ成論語よみの論語讀すじやといふて學ぶ事を制し有たら若ひ者を文盲に仕立るも無理おら を尊ひ聖賢の道まを惡名付るは皆身持の惡ひ學者の罪おり何程古の事を覺え善を知ても身まを行さればむかし新澤山まを覺て居ると同じ事まを大お益はおし身の養生にも此類お心得違ひ多し太陽子は大酒飲でも仙人に成たといふては大酒を飲み志賀の瑞翁は九十で女房呼で百八十歳まで長生仕たといふて妾を抱隣お人が湯まを入て病が愈たといへばおちまを湯まを入虫腹のこゐるに栴檀の皮飲てよければ冷腹まも栴檀の皮をのみ他所まを灸はへればこちにも屁じと灸をへ我身はどうあた性やら醫者まも問ぬ人まねして身を害する者多し人の腹の中た人々の面のどく皆少

づゝ違有ものおきべ藥ゝかざらす灸も針も湯治もくそゝく醫ゝあづねて其さゝづゝすべきとおり

興國奇談 和莊兵衛卷三

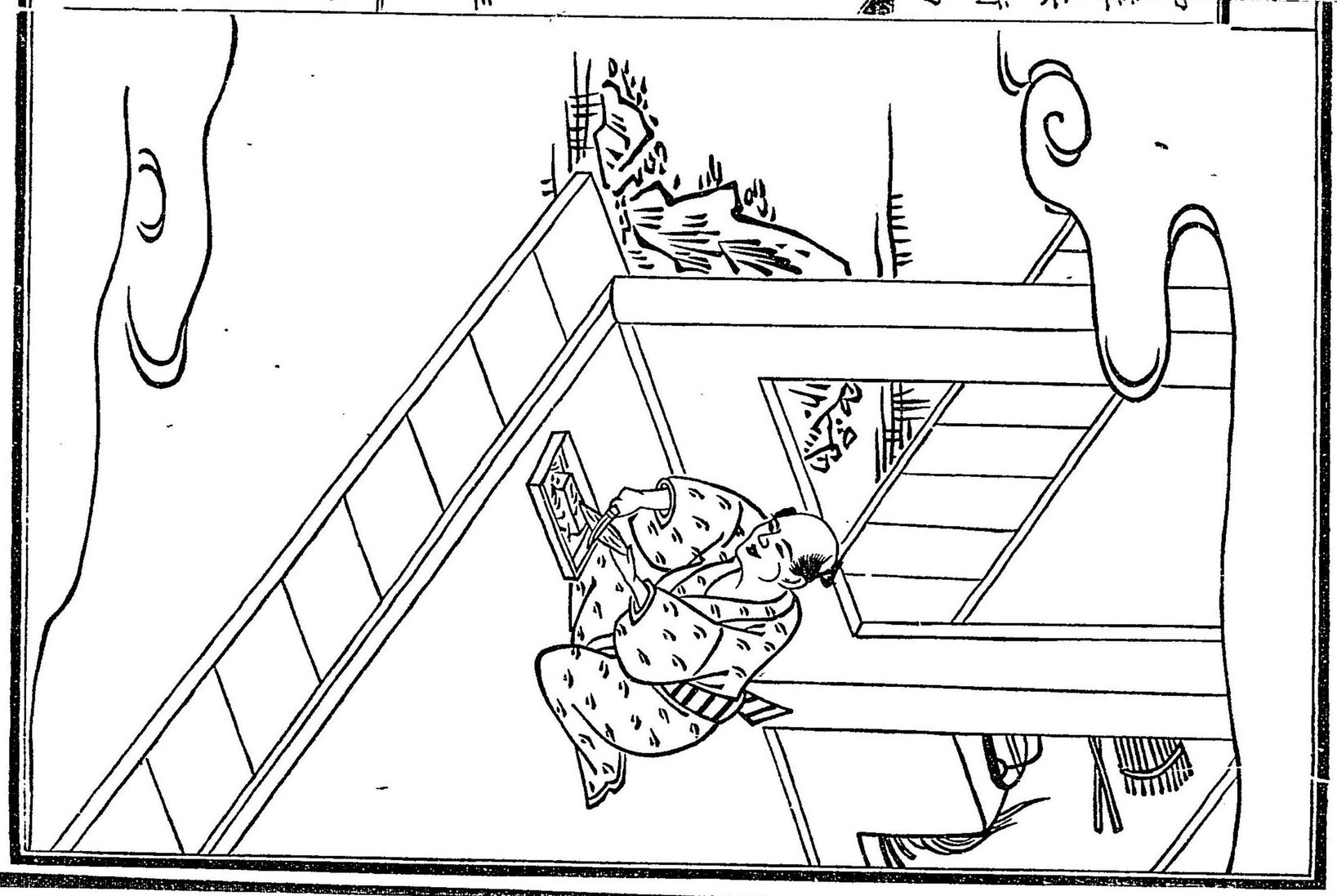
興國奇談 和莊兵衛卷四

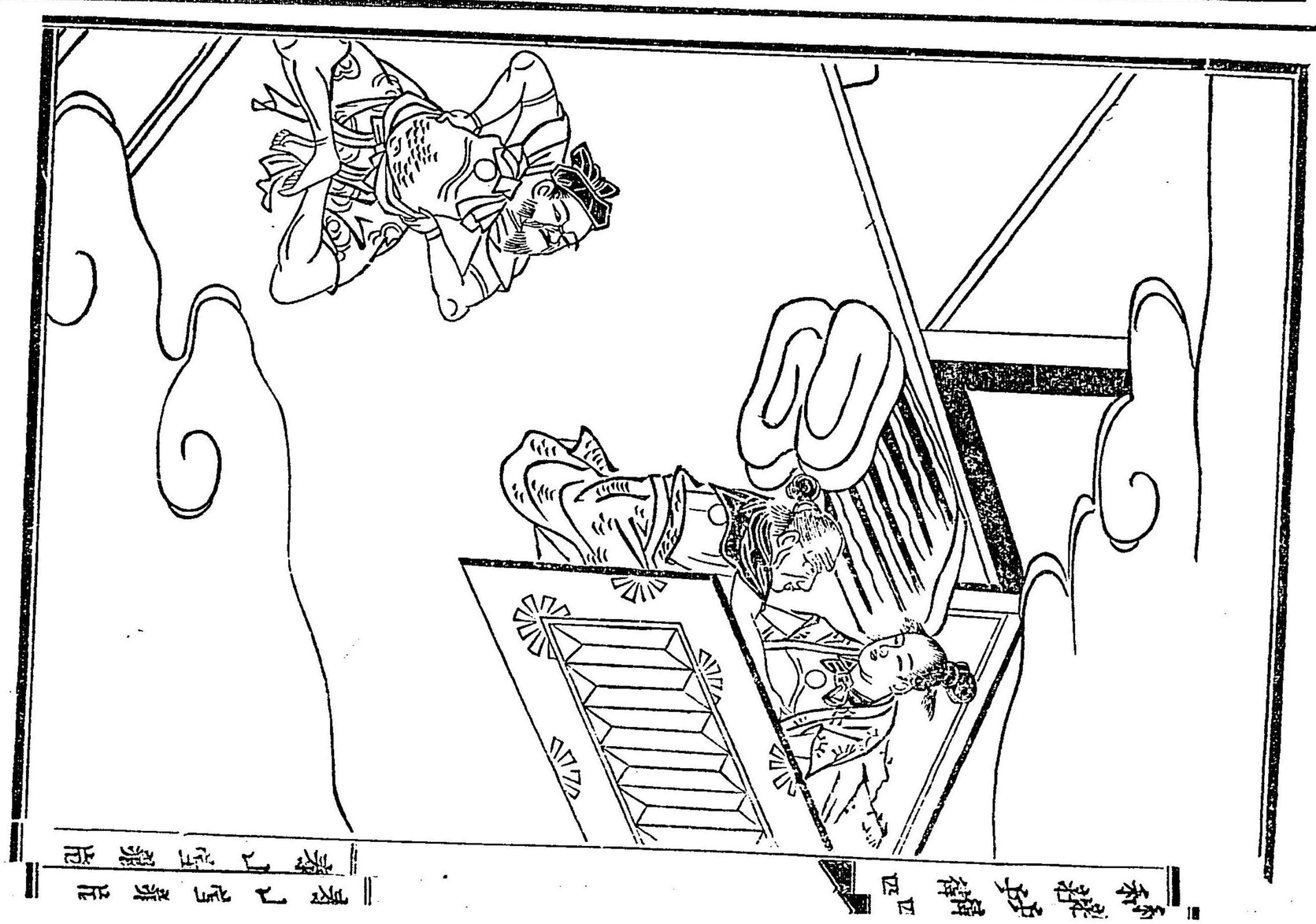
自暴國

古めかしき好古國の逗留ゝどうやら心も古ふ成たやうゝ思ひ親子喧嘩ゐ挨拶ゐ去くゝるざゐん直しゝ何國ぞ新ひ國あるまいゝと又數千里飛まゐり一ツの大國ゝ飛下りゝ其名をとへべ自暴國近道町の指寄目前屋理八といふものゝ所を旅宿と定め暫く逗留ゝして毎日國風を見廻りけり。ふゝざ成かゐ此國の人ゐ男女とも胸ゝ穴一ツ有て貴人高位ゝても馬駕乘物といふとおく胸の穴ゝ棒を通ゝてかきあるき賤き者も三人連の道中ゝゐかはりゝゝゝ棒ゝ乘て行べ草臥もそくおゝ子供連た藪入おどゐ惣領から乙の子まで三人も五人も棒ゝつき通ゝて目さゝ爾千たやうゝして持あるき又ゐ醫者どの迎ひゝ行時も遠者お者が一人行べ外科と本道と一荷ゝゝて來る故甚だ自由おるものゝれども益あれべ又害あるとゐり其穴ゝも亦いろゝゝの病あり或ゐ山道森林おどとゐる時ゐ木の枝ゝ引かゝり度々怪我抜をる事おり此自暴國に昔より定りたる法といふ事なく佛法儒道もおく古を學ぶ事書籍を見る事法度ゝて思ひゝゝ得手勝手指當道理をいふて畢竟の善惡をおらず家居衣服ものいひまで月々日々ゝかゐり。たべ目前の

理をいふて君ニつかへる者君をうやまはず同ゞ人間おれども養ふてくれるゆゑ奉公してやるのゞや外に何も恩はないといへゞ息子は父母を尊ぶ産て下され育てゝ下されと誂へ誂へせぶ頼はせす親々が細工ニ拵て産育て置て身持が惡ひの賢ふおいのと。おれが知た事のやうニ。あたげたひおと我儘八百女房は夫ニまけて居ず兄と弟は同ゞ腹から出たものおれゞ跡の先のはなゝと弟が力量兄にまされゞ兄を追出し女房が賢けれゞ男ニ隙狀をやり朋友は腕おしてもつよひ者が頭に成何から何までさー當る理をいふて後の害をおらぶ士農工商とも尊卑の禮儀もへだておく若く壯ニて能業をつとめ能はたらく者が衣食とも能物をとり年老て働のおとる者が衣食とも惡きものを取親ても兄ても年寄て手足不自由ニ成役ニ立ぬやうに成と山や谷へ捨て仕まい打くつろいて若ひ者寄集りてはは余處の國の風を讒はおし唐土日本とやらいふ國ニは學文といふて。むかしの事を書付いろ〳〵と世話やゆて道の法のと教まはり役ニ立若ひ者がこるひものを喰惡ひもの着て役ニ立ぬ年寄ニ能もの喰せ能もの着せて孝行とやら道とやらいふはどふおた事じや昔の事が今の役ニ立ものか道理の聞へぬ惡ひ國おちの國はかしこひ仕ニせ結構お國じやナアと打くつろひで居る内に何國の島でもかはらぬ

は月日ニ居る関守おくひま行駒ニかけ立られそろ〳〵と年老て頓て捨らるゝまはりニ成と。いろ〳〵の恢言叔々こちの國の惡い事は余所の噺を聞ゞ孝の道といふて子を持者は老ぶたのしこ隠居さまとて能もの喰て能もの着て遊んでゞかり居るといふ夫おそ人の實の道若に内ニは何が不自由でも手足が達者おゆゑ何らひ事はないものじや。此やうニ年寄てこそ安樂をおたひもの是はまた情おい山へ捨るとはどうよくゞやと泣てもゆめひても己々が親々から捨來つたおらひおれゞ是非ニ及ずおく〳〵遠き山中へ捨らるゝも哀おり叔此國ニ第一ふしぎおは女房が子をはらめゞ其男つわりを煩子を産時も女は腹こはらず男の腹おはる國おり打寄ては餘所の國を笑ひそしり日本唐土天竺ニは女房が子を産時も男は惡阻もせぶ腹もおはらずとは片よつた事おり女は懐胎して十月が間大お腹を抱てさま〳〵の辛抱産おとしても乳を出ませ夜の目を合さず抱かゝえ何もかも女ゞかりニ世話さをとは聞ぬ道理。せめて産ときおりと腹は男がこはる筈じやといふ理りを聞てはいかさま是ゞかりは其道理いやと言れはと和莊兵衛も感心して居たりけり幸ひ旅宿の内義此月が産月との尊女が子を産ゞ男の腹こはる國有と長崎で噂ニは聞しがどのやうなものぞ此度くはしく見て歸らん





と樂て逗留する内或夜夜半時分から亭主の理八腹がこゐると言ひ出せゞ内義もどふやら腰が張やうな外の事でゐ有まいサア〳〵氣の付たのじやと内義がそろ〳〵火をたき付夜着ふとんをかさぬけ産屋を拵あきの方へ向て居り亭主のこゐりを待て居る内主ど理八ゐ次第〳〵ヨこゐりつよく蒲團を取草ヨ取てうん〳〵いへゞ内義ゐ産家ヨ寐ころんで煙草吐み〳〵且那殿猶出さんせ其所が男の辛抱ぢや青竹を握りくだくといふ程ヨ隨分堪忍さんせと力を付て居る内初産とみへて珠外こゐりつよく身もだゑーて息を切さぬべかヨヨてサア〳〵先ヨからたついこゐりやうもう産ヨる筈じや早ふ身がまへーて産てくれいとせり立ヨバヲヽせゐーと言つヽ内義も居直ツて一猶出ーて息ぺつて見てもまだこゐりが足らぬ故産れませぬ最一ちきりおゐらんせ。埒の明ぬこゐりやうぢやとせかされ亭主ゐ泣聲出ーて此うへヨおゐつたら死るヨい おのヨが産やうが埒が明ぬゆゑ男ヨ長ふ苦痛さすヨいけたいな女じやヤレ産〳〵とぢゆつお紛ヨせり立ゆれべおあさんがおゐりやうが足らぬゆゑどうも子がへりせぬヨいおア男の樣にえおい卑怯お人じやヤレ早ふこゐらんせ鈍お人ぢやと腹立聲イヤ我が卑怯おゆゑイヤおあさんが埒明ぎこなんの樣お男持てゐ産をる度に身がつゞかぬイヤ我がやうお女房持てゐおゐり死る。おくどうめがど祐ぼうめがといたき紛れの女夫喧嘩産かゝつて居る女房去ヨヲヽ暇取ふ去狀書やと疊たゝくやら腹おさへるべら泣やら腰をさをるやら痛や腹立やヨくやつらやとヨんべくお子の灸をへゝやうヨ一間の内ゐ煤排同前和莊兵衛も寐まきおがら這出て挨拶やら分抱やらハテ氣の短ひ御亭主マアだまつておわらおやれ追付産ま去よお内義も口答せぎと早ふ居をゐつて産おやれと二人をおだめつをのしつ。もやくやの内ヨほぎやあ〳〵の初産そりや産たゐと湯をヨかをも篦けするも和莊兵衛一人内義ゐもとより産家ヨ居り亭主ゐおヨり草臥て脚腰立ず腎者むかいに行さきも穩婆ぶ所も去らぎ藥鍋が何所ヨ有やら經節酢徳利の置所も豚手をおらねべ何一ツ間ヨ合ぎまご〳〵する内やう〳〵と夜が明てから醉近所の婆かゝ達が寄て来て湯をあびせたり跡の取つまへ和莊兵衛ゐ一生ヨ覺えぬ難義おうと草臥さらべ一体と片すゑへ寄て蒲團引かぶり。つく〴〵思ふて見れべ。はじめ聞た時ゐえつともの道理と思ふたが其場ヨ成て見てゐ女夫づれで産ヨかゝつて居てもつまらぬものとかくれ定りの通女がおヨつて産て男ゐ外ヨ勤ねべからぬ理あり目前の理ゐ役ヨ立ぬもぶと笑ふて爰も飛去りけヨ

養生

人と獸とハ格別才智違ふた樣ニ思へども聖賢のをしへおゝ心の儘ニ身を行ふ小人の智と獸の智と大違ひハおゝたものゝ狐の罠ニかゝるも其罠をゝらぎしてかゝるニハあらぎ此鼠を喰ハ災ニあふとハ知おがらも一仕合よく人ニゝられぎ喰得る事も有ふかと己が好所ニ心くらミ非ニ理を付て忍来る災をゝらず小人の好所或ハ財寶ニ迷ひ色欲ニ迷ひ隱れ忍てゝる惡事顯ゝべ災にあふ事ハゝりながら仕合よく顯れぬやうニ仕おゝせる事もあらふかと好所に心くもり後の災をゝらず人間の一生ハ夢まぼろし出る息の入をもゝらぬ世の中おれども其する業ハ明日の事と明年の事と次第〳〵ニ先の事ばかりして居るものゝ二月ニ来蒔ハ八月ニとらんゝめ十月ニ麥蒔ハ来年五月ニとらんゝめ夏機織ハ冬着んためゝり今をもゝらぬ命ニて明日の事来年の事して居るハ愚おゝ樣ニ見ゆれども聖賢のをしへハ皆此どくまハり遠ゝやうおれども。つゝまる所人間の一生を心ゆたかニ身安く暮させんゝめい後〳〵と世話やかぎたり此自暴國のやうニいしへの教をゝらぎ己々が心の儘の近智恵にて明日の事ハゝれぬうまひものハ宵ニ喰へ好たといせぬが損ぢやと目前の道理を付る故今日能て明日惡く今年能て来年惡し今の心を安くせんとて若ニ不忠親ニ不孝人ニ惡をすれハ頓て我身ニまハる事をあんじ煩ひおのづから朝夕心よゝとおゝし病ばかりを煩ひとハ言ぎ心の煩ひハ病ニも勝たり人の養生も百の病氣より生るといへゝ常に心の煩ひおきやうニ何事も後の報ひを思ひ君父兄弟ハゝふまでもおく世の中ニ恨ニくまれず胸ニあんじ煩ふ事なけれゝ自ら心安く心神勞をる事おく万の病おこらぎ長壽おるへし

大人國

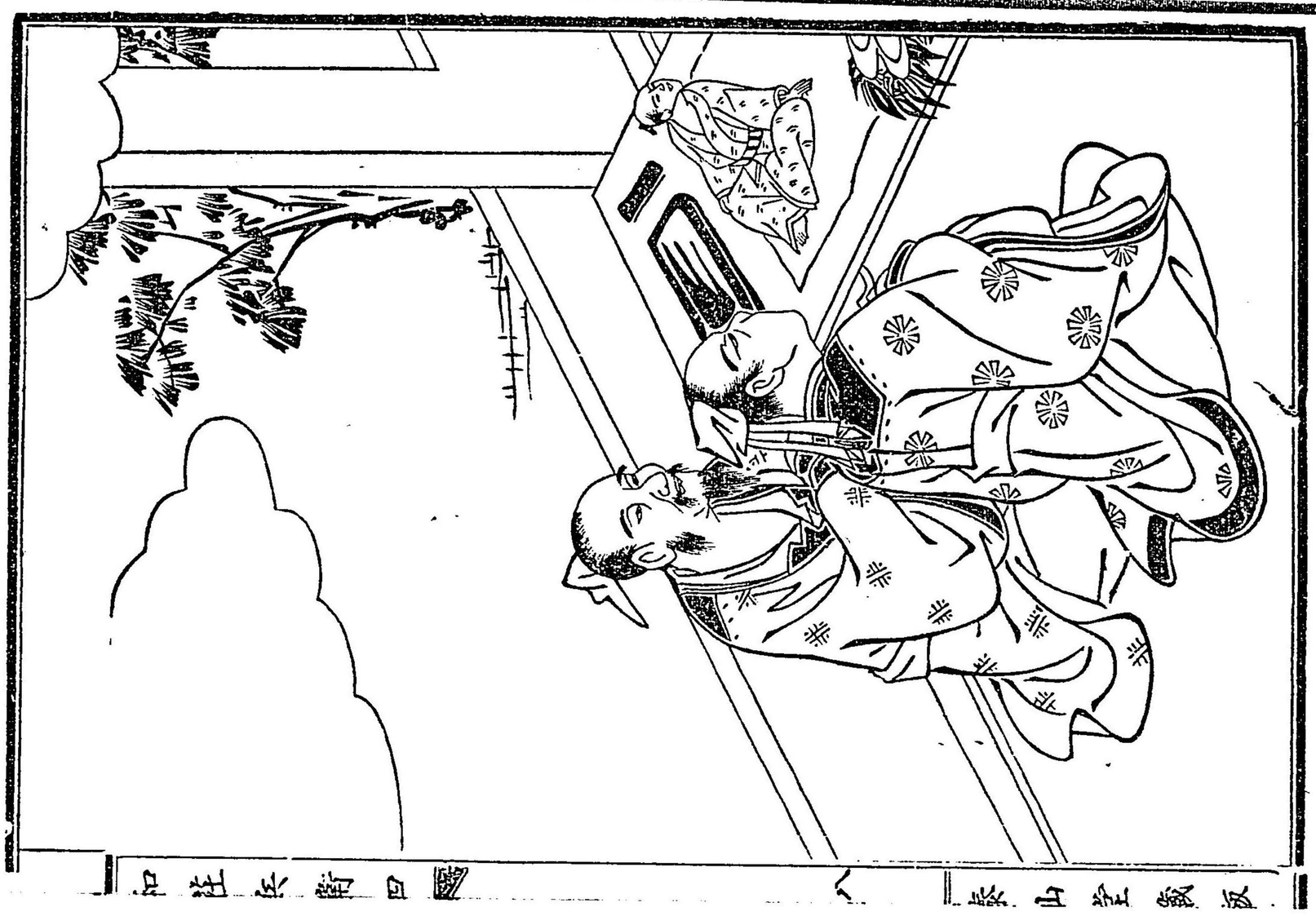
物かハり星うつれども顏色氣力少るかハらぬ和荘兵衛不死國を出てより有とあらゆる國々をめぐりめぐれども格別かハつた事もおゝ此世界をはなれて西方十万億土彌陀ゝ淨土へ見物ニ行ふかと思へども是も釋迦の尊に委く聞て居る所おゝ龍宮ハ浦島太郎が案内の事おきゝ別ニかはつた事も有まじ。さらゝ是より此世界の外へ出て釋迦も孔子もゝらぬ所を見て歸り世間知りぢまんの鼻明さんとおもひ付又鶴ようちまたがり先南海の果からつきぬけんと脇目もふらず南をさして飛程ニ〳〵鶴ハ名鳥乘人ハ達者一日ニ五六百里千里程ヅゝ飛行ゝ其内ニハさま〳〵の國見ゆれ共此世界に

ね目もかけず毎日〳〵凡三月あまり飛けれべ次第〳〵ゑ月日の光も遠ざかり一日々々と日の暮かゝるやうゑ成行しが五月ぶりゑね夜晝おゝの真くらやみへ飛込けり鶴も覺束おそふ羽を出してぐう〳〵おけば。さゝもの和莊兵衛も心細ふ成生おがら闇地獄へ落たかと胸さわぎしおるがいや〳〵此世界を外へ出れば一度ね月日の光のとゞかぬ所へ行筈なり此闇を飛抜れべ外の世界へ出るゑ程も有まじ一精出せ〳〵と鶴をはげましけれべ聞分たる樣ゑ身ぶるひして羽根打たゝき矢をつくどく飛出し行ほどに飛程ゑ元より夜晝おゝの闇なれべ何日といふ數ね知らぬども。四月べかり飛けれべそろ〳〵と明く成おんおく一ツの世界へ飛出たり生かはつたやうゑ思ひ先かゝこへ飛下り心靜ゑ一見せんと大お竹藪の中ゑ廣き道有ければ立休らひあはらゝ目をふさぎ心を落つめて居たりしがさらべいかおる國ぞ一見せんとくゑつと見ひら充頭をめぐらして四方八方見渡せべ最前まて竹藪と思ひし所よく〳〵見れべ麥畠なり其大サ日本の大竹程あり扨も大お麥の有國かおと其邊十町べかり歩行て見れべ麥ゑ限らず何を見ても其大サ目も心もとゞきがたし畠さかいの權の木のふとさも和莊兵衛が手に一抱も有松杉檜いふに及ぜかりそめの樹木の大さ一町まわり半町まわり。

道端のたんぼくすぎ菜の長も日本の者の長ほどあり山川草木の大さ唐土天竺ゑ十倍大おる國なり是ね肝のつぶれた事と其邊うろ〳〵と二三里べかり先へ行て見れべ町家と覺し充家多く建つゞきたり其大サ皆大佛の堂より高く城かと思ふ土藏もあり。かりそめの山も富士の山より高く軒下の去よろ〳〵おがれも淀川より深く東山ほどは丈はさだめ山もあり湖水ほどの泉水も有何を見ても別世界目ゑあまり心にあまり和莊兵衛ね只あれはて〻家身がちひそふ成たかと思ひよく〳〵氣を付て見れ共やつぱり五尺四五寸の男是ねふしぎおとゝやとたゝゞみ居る所へ大勢人出來り男女共皆長の高さ五丈四五尺六丈猶餘大男にね七丈ばかりおるもあり九歳十歳べかりの辻髮置たる丸額丈子供も二丈三丈より小充ねおゝ大勢人寄集り和莊兵衛を見付て肝をつぶし扨も〳〵小ひ者が爰ゑ居るとちよいと引摘みて手ゑのせ。ためつすがめつ打詠て居たりしが先其方ね何國の者おるぞ化ものか人間か何故爰へ來りしぞと詞をかけゝるゆゑ和莊兵衛手の内ゑ踏またがり大音上て抑我ね大日本の者おり諸國見物の序にはる〳〵爰ゑ來たり小兵おりと侮て聊示せべ慕經流の早業ゑて目ゑ物見せんと弱ゑを見せずから〳〵と笑へべ皆々にお〳〵と打笑ひ扨〳〵珍らしひ可愛らしひもの

かゝ唐土天竺日本の事等まゐ聞しがいまだ委しく視ざりし事おきゝ先我方まゐ飼ふて置べしといふる其内まゐ宏智先生とて身の長六丈五尺ばかりの惣髪和莊兵衛を摘て左社手まゐ入右の手を蓋まして子供が營取たやうに大事まかけて持歸りぬ叔先生の所へ落着て見れゞ商人とも百姓とも見えず内のていを見るまゐ隱居らしく此國の内でい小イ家おり御堂の座敷おどある四疊半の小座敷まゐ入三間まゐ六間程の机の上まゐ毛氈の切を敷其上まゐ和莊兵衛を置て日本社真瓜おどの飯粒を荷葉程の箸まゐ指て鼻の先へ付る故和莊兵衛も雀の子の心持まゐ成て朝夕飯粒をかゞつて逗留を叔近處から宏智先生の所まゐ珍しきものを捕置きたりとて毎日〳〵老若男女見物多く出来りて手まゐのせて見〳〵まゐ天窓まゐ置て見たり色々に評判して叔々よふおつきまーた摺餌いらず麻の實いらを飯粒で育ば鵜より飼よふでざるおどゝさま〳〵おぶりものまゐおらるれども皆大人の中おれゞ荒氣も出さきず手向ひすべ知やうもおく暫く月日を送りけり。叔此國の風俗を見るまゐ何事も唐土天竺まゐ十倍おさりて大く五風十雨時をたがへを五穀よく實のり民ゆたかにて何一ツ不足もおき上々國おり然ども人まゐ道も法もおく國政の沙汰もおく儒佛神のをしへい勿論仁義禮智の名もおく何もおらぬ無藝國なりた

ゞ男い田畠を作り器を取扱ひ女い機を織縫物して外の事おく折々寄合〳〵遊ども尤らしき噺もせを人事もいまず四方山の事いふて居ばかりおり和莊兵衛つく〳〵思ふやう此國い形大おるゞばかりまて人まゐ才智なく獨活の大木といふ安房國と見へたり我小兵おれ共聖賢の法を以て此國民を導き政を取て民をおつけ國性爺が東寧を取たやうにあつゞれ此國の大將と成べしと思ひ付大勢人の寄たる日和莊兵衛机の上まゐつゝ立上り大音上て云けるい我生國い日本おれども此千年以來唐土天竺いいふまゐ及を普く世界をめぐり〳〵てあらゆる國風人の道を知たり今此國を見るまゐ形大おるゞばかりまて人間の道を知るものおし淺まーくいたいしき事おり夫我世界まい人の道備いらをといふとなーし先唐土にい三皇五帝より道ひらけ老子孔子莊子孟子おどゝいふ聖人賢人普く人を導き天竺まゐい釋迦如來因果のむくひ地獄極樂を以て人を教へ我日本まい伊弉諾伊弉冊の尊天照大神あらゆる神達正直をもつて人代導きゐまゐ其をしへまゐよつて國家よく調ひ民安くゆたかまて業をたのしむ先仁義禮智をおらざれゞ人と生まし甲斐いおし我今日より各まゐ其教を說聞すべしと机の上まゐ立上り堯舜より文武周公の政孔子老子の道を說又い釋迦の法を語り大な人まい



ふとおれば飛上りのぴ上り舞をばかりヨ道を說けり元より和莊兵衛千年あまりの執行おさまべ三千世界の事ハ古今ヨ通ゞたり殊ヨ何もあらぬ人の中でいふ事おさまべ恥かしひともおヨひとも思ハぢ言を盡し理を盡しれそらゑ石佛もうおづかを程に毎日々々言けさ共大勢の中に一人も合点ゼ行そふお貌もおく皆にこ〳〵と笑ふて叔々珍らしひ物雉狗より藝もよふする教ぬとでもいふて鸚鵡より面白ひ物でござる餌の過ぬやうヨ大事にお飼なされおどゝ小馬あーらひにーてとかく相手ヨあらぢ毎日〳〵五七日が間儒佛神の有がたき事ども說おめせども糖ヨ釘地ヨ灸叔も〳〵大お形ーて鈍お國じやとあれ衆て居たりーが或時和莊兵衛宏智先生ヨ言けるハ我普く國々をめぐヨたれども此國ヨ勝りて大なる所もおく是に並ぶ能國もおーー然れども外々の國いのおる小國下國ヨても聖賢のいにーへを敬ひ五常の道國政の法なれ所ハおーー此國程善惡もあらぢ無藝無能おる所ハおし甚幸ひ參り合たれば人社人たる道を教んと此間より段々說聞それども一向ヨ通ざるや合點ぢる者おーー天性此國ハ大ゼおるばかりヨて人に才智おき國おるが叔々いぶゝーきとおりと問けれどもうおづいて答ぢ二度も三度もくりかへーて問れべ先生にこ〳〵笑ひ〳〵和莊兵衛が天窓を撫て言ゐるハ小人ヨ誠の漸ぢるハおとおげおく阿房らーけれども汝ハ呑込のよさそふお者おるゆゑ語り聞すべーとつくりと合點せよ夫大を以て小を見るとハ安く小を以て大る見る事ハ難ー汝が世界の者我國の爰にあるとをあらず既ヨ我國の人の心をあらぢ我國の者ハ女童までも汝が心をあるとヨ安ー又小智の眼を以て大智の人を見ヨ愚おやうヨ思ふもおり汝が形五尺ヨ過ず漸地方九万里の内ヨうろたへ纔三千世界をきよろつきまハり是より廣い事ハおいと心おごり聖賢の教より尊い事ハないと思ふ小き心故大お事ハ合点行まゞ人の智大おる者ハ始より終伐さとる始より終をあるものハ迷ハず迷ぬ者ハ惡い事ハせぬものおり智小く始を知て終をあらず夏暑き時ハ冬の寒きを忘れ冬寒き時ハ夏暑さを思ハぢ近きを知て遠ゼをーらざる者うろたへ迷ふて惡をぢぬも社おり汝が世界ハ小きに應ゞて人の才智も小く學ざまべあらぢ古人の糟粕ヨあらされば甘ぜぢ法ヨあらされば治らず善にぢゝみがたく惡にぢゝ安ー故ヨ天より聖人といふ世話やきを生て。うろたへ者共を善所へ導其世話やきヨも思ひ〳〵の得手有て老子莊子ハ空ヨたとへて生さまゝで有体の能所を教へ仲尼ハ仁の義の禮のといふ大綱を引まハーて人に我儘をさせぢ實を以てよい道へ引出ー釋迦ハ世

間の人氣の欲深事を能のみ込さまく〳〵のうまい事やこわひ事いふて欺しをかして善道へ引込皆子供あしらひまして教導く事なりされば教ゐ小人ゑ益有のみ法ゐ小人を入る筥あり小人ゐ箱の内ゑ遊んて外をあらず大人ゐ筥の内を知て箱の外ゑ遊ぶ汝纔三千世界の筥の内ゑ遊て外をあらず此間さま〳〵口をたゝけども此國の者ゐ子供のゑんばくいふやうゑおかしく聞流たり汝が世界ゐ才智小く惡をする故ゑ教の法のといふむづかしき変あり我世界ゐ智大く惡をせぬ故ゑ仁も義も禮も法も用る所あければ教もいらぬ大人國の心合点がいたか和莊兵衛かをらぬ〳〵汝らも此ちつぽけな形でえもあれぬ鼻のさきの小ひ智惠ゞまんして惡あがき惡工せずとも釋迦や孔子のいふ通おとおーう守て居て一生心よく安樂ゑくらせよと背中さをつて語ければ和莊兵衛ゐ大口明て恥かーひやらこゑひやら大も小も果のおきものゞやと自得して鶴ゑ打乘り久しぶりて目出度日本へ飛かへりぬ

興國奇談 和莊兵衛卷四 終

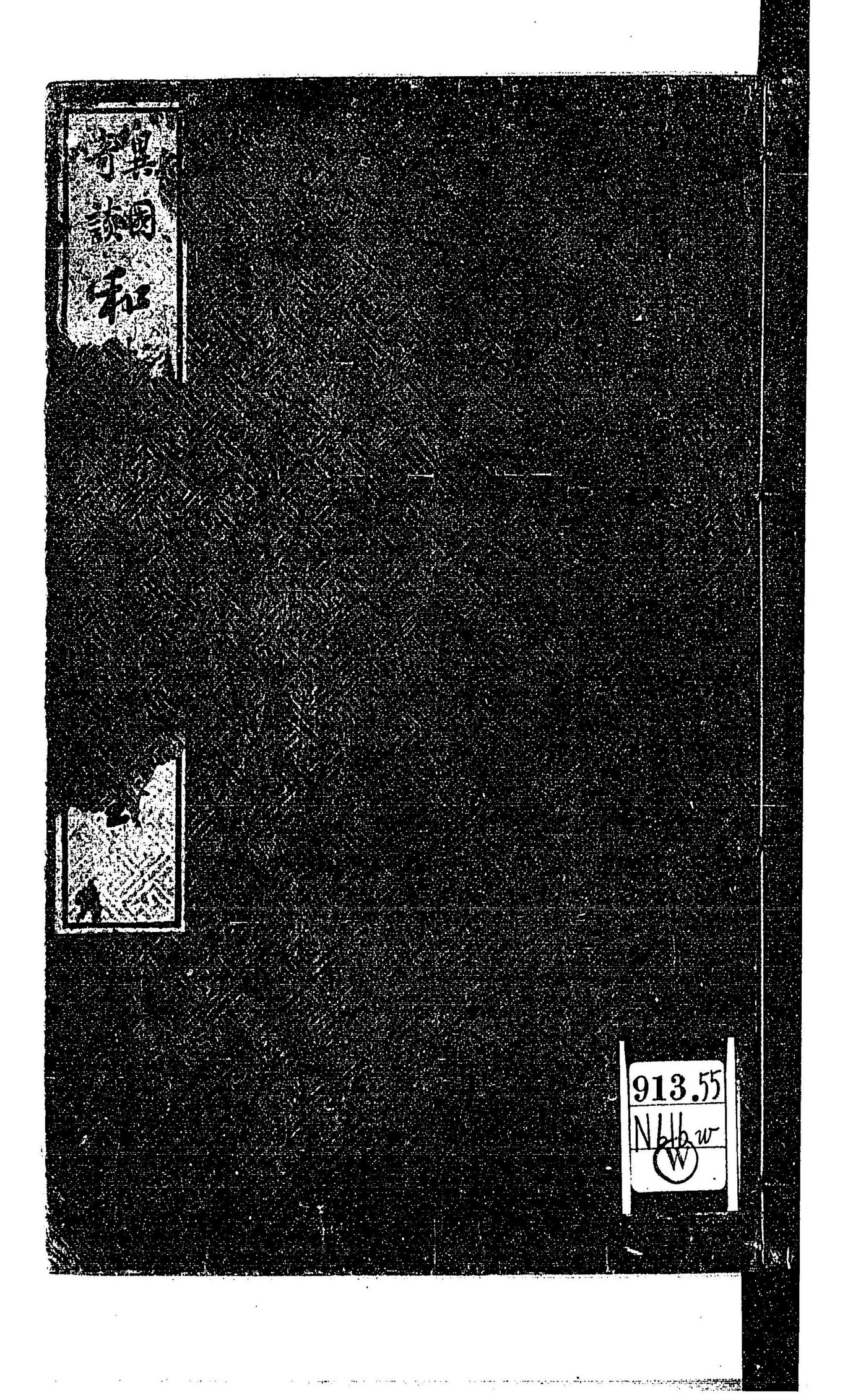
明治十六年十一月十八日飜刻御届
明治十六年十二月五日出版

定價金五十錢

飜刻出版人 兵庫縣士族 佐々木左久馬
東京京橋區宗十郎町四番地寄留

發兌元 京橋區宗十郎町四番地 泰山堂

大賣捌
芝區三島町 甘泉堂
日本橋區通三丁目 丸善書舗
神田區雉子町 巖々堂
京橋區南鍋町 兎屋誠
日本橋區通三丁目 丸鉄



089743-000-5

913.55—N616w

和荘兵衛

遊谷子／著

M16 .

DBM-2084